

「佐武と市捕物控」における作品構造とその変遷について

On the Story Structure of "Sabu to Ichi no Torimono Hikae" and Its Changes

伊藤 景

要旨

石ノ森章太郎作品「佐武と市捕物控」における『週刊少年サンデー』（小学館）版と『ビッグコミック』（小学館）版の差異として、作品の構造に注目してその変遷を追究する。また、キャラクター造形が読者層の変化によりどのような変化が見られるかを探る。それぞれの雑誌の創刊時の時代背景から、石ノ森が考えた子ども向けマンガと大人向けマンガにおける役割について彼の言葉を追うとともに独自に考察を行い、石ノ森が「読者」の求める作品をいかに創意工夫を重ねていたかその手法を明らかにした。

はじめに

石ノ森章太郎は、一九五五年から亡くなる一九九八年まで旺盛な創作活動を続けたマンガ家である。彼は、多種多様な作品を描いており、その作家活動の全貌を明らかにすることは簡単ではない。石ノ森は多くの読者を対象として創作活動を行ってきたおり、デビュー当時は子ども向けや少女向けの作品が多く、それと同時に少年向けの作品も手がけた。時代を経て、現在ではマンガの読者は子どもだけではなく、青少年や大人も含まれるようになったが、石ノ森は読者の変化にも柔軟に対応し他の追隨を許さぬほど数多くの作品を発表し続け

た。石ノ森は読者の要求に応えるかのように作品を描いたことで、生涯マンガ家として第一線を走り続けることができたのだろう。石ノ森にとって読者は「おきやくさま」であり、読者に対して次のような考えを抱いていた。

マンガ家に限らず作家（ものづくりなら誰にでも）には、受け手、つまり読者に、自分の作品をよりよく理解してもらいたい、という心理がある。その作品が広く支持されれば（平たく言えば「人気」を得れば）嬉しい。だからこそ一生懸命につくる。だからこそ市場に出す。（中略）

読者は勉強してまでもマンガを見ようとは思わない。一時オモシロければそれでいい、読者は神サマ。神サマはワガママ、神サマに期待して

利があった、という話は余り聞かない。¹

ここでは、読者に対して皮肉を込めてこう述べているが、それでもマンガを描き続けていることを考えてみると、石森は「人気」を得る喜びを忘れることができないのであろう。そのためか、石森は読者層を意識した上で作品を描くことが多いが、初期作品においては、「商業誌に発表していながら、読者がどう読むかということ」²を意識して描くことはなく、自分が面白いと感じる作品を自分のために描いていたと語っている。しかし、その意識は石森が海外旅行へ行ったことによって変わっていくことになる。海外の文化に触れることで視野が広がり、マンガに対する考え方にも変化が生じ、今までの自己満足のためのマンガから「読者を意識したエンターテインメント」としてのマンガを描くことに徹する覚悟を決めたのだ。

読者を意識した作品づくりについて、石森の思考及び手法を読み取ることができるのが「佐武と市捕物控」であると考えられる。この作品は、少年向け雑誌『週刊少年サンデー』（小学館）から大人向け雑誌として創刊された『ビッグコミック』（小学館）へと連載の場を移しながらも、一貫して「佐武と市捕物控」というタイトルの名の下に作品が継続していた稀有な作品である。石森自身、「佐武と市捕物控」の掲載誌が『ビッグコミック』へと変更となった際には、登場人物たちは変えずに、作品の描き方自体を大幅に変化させたことを語っている。そこで、本論では「佐武と市捕物控」を題材に、石森が作品の読者層とされるターゲットの変化をどのように捉え、作品づくりに昇華したのかについて考察していく。

一、「佐武と市捕物控」について

主人公の佐武と相棒である松の市が初めて登場するのは、一九六六年の『少年サンデー増刊』（小学館）春休みゆかい号だ。この時のタイトルは「佐武と市捕物控」ではなく、「縄と石捕物控・赤い猫」であり、三作目にあたる「天狗」

が同年の『少年サンデー増刊』夏休みまんが大特集号に掲載された際に、シリーズタイトルを「佐武と市捕物控」と改め、それ以降は一九九六年に『ビッグコミック』の九月九日増刊号に掲載された「青大将」までこの名で発表されている。

この作品は、岡っ引きの佐平次親分の下っ引きとして、寝込みがちな佐平次に代わって佐武が江戸の町を駆け回り、盲目で居合斬りの達人でもある相棒の市とともに様々な事件を解決していく、というものである。

ここでは、「サンデー」系の少年向け作品として描かれた「佐武と市捕物控」を「少年向け」、「ビッグコミック」といった大人を読者対象として描かれた作品のことを「大人向け」として区別したい。佐武は、少年向けにおいては、岡っ引きの佐平次の下っ引きとして働いている。石森は一作目の「赤い猫」において、物語が始まるよりも前に、「むかしの警察組織」と題して、物語の舞台となる江戸時代の奉行所について解説をしている。これは、読者が子どもであることを意識して、分かりやすさを重視した紹介文となっていて、例えば「奉行」を「今の警視總監」、「岡っ引き」は「銭形平次捕物控」の「銭形平次」や「半七捕物帳」の「半七」を例にするなど、当時の人気作を取り上げることによって、子どもでも理解できるように丁寧に江戸時代の奉行所の組織について説明をしている。これにより、佐武が本来であれば自由に事件の調査をすることが許されていない立場であり、彼が特別な下っ引きであることも印象付けている。

「佐武と市捕物控」は、一九六八年にテレビアニメ化され、一九六九年九月までに全五十二話が放映された。このほかにも、二度テレビドラマ化もされており、一九七一年十月六日から一九七二年二月九日まで「十手野郎捕物控」として、一九八一年七月三十一日から一九八二年十二月十日までの間に「時代劇スペシャル」の中の作品として「佐武と市捕物控」のタイトルで四作がそれぞれ放映された。そのほかにも、近年ではBS日テレ開局十五周年記念スペシャルドラマとして二〇一五年十二月十九日に『ビッグコミック』版の一作目である「隅田川物語」をベースとしたテレビドラマが、翌年の十二月十七日には「佐武と市捕物控 冬夏の章」としてその続編が放映された。一九六六年に初めて作品が発表されてから、約五十年後にテレビドラマ化されるとは、石森自身、

夢にも思わなかっただろう。しかし、五十年を超えてもこの物語を自分たちの手で作りたいと刺激する「なにか」が「佐武と市捕物控」にはあるのだろう。その魅力について考察していきたい。

二、『週刊少年サンデー』と『ビッグコミック』について

子ども向けマンガの歴史は長く、石ノ森自身は、「手塚以前、漫画は基本的に諧謔と風刺と滑稽を身上とする絵」³がマンガの原形であり、大正時代はじめの岡本一平の作品である「漫画」がマンガの源流であるとしている。そして、その後「コマで展開するストーリー性を帯びた子ども漫画」⁴が登場するようになったと考えており、田川水泡の「のらくろ」や長谷川町子の「サザエさん」といった作品の登場によって、「漫画」が子どもを読者として取り込んでいくようになったと考えている。子ども向け「漫画」は手塚治虫の『新宝島』を転機に、「絵画を原点とする『漫画』が、紙の上に描かれた映画という『マンガ』になった」⁵。ものとして、現在に至る老若男女を読者対象とする「マンガ」にまで成長したと石ノ森は分析している。

一九五九年に『週刊少年サンデー』と『週刊少年マガジン』（講談社）が創刊され、徐々に月刊誌が淘汰されていったことにより、「マンガの読まれ方」が「変質していった」とマンガ評論家である米澤嘉博は捉えている。その変質について米澤は次のように述べている。

雑誌、マンガの読まれ方は三十七、八年頃に変質していったように思う。トナメント制を中心とした闘いというわかりやすいドラマ展開を演出するパターンの多用、半ば習慣と化していく週ごとの購読、読み捨てていく「情報」としてのマンガ、マンガ内の出来事を事件として刻々と伝えていくメディアへのマンガ誌の変質――そして産業としてのマンガの勃興。（中略）週刊誌は、まちがいなく、マンガを大きく変えようとしていたのである。⁶

週刊誌というメディアの登場により、マンガは子どもたちに新たなコンテンツとして受容され、活況を呈することとなった。『週刊少年サンデー』と『週刊少年マガジン』の刊行が続いていることを見る限り、週刊誌は子どもにとって身近なメディアとして定着したといえる。そしてまた週刊誌が子ども以外の新規読者獲得に向け努力した結果、「少年」だけではなく「少女」や「青少年」とその読者層を厚くし、「大人」もマンガを読むことが当たり前となった現在の状況を生み出したことは、週刊誌の誕生が要因となっていることに疑念の余地はない。

さて、『週刊少年サンデー』創刊当時は、子ども自身が雑誌を購入するのではなく、大人が子どもに買い与えたものであると考えられ、子どもの手に渡るまでに親による「選定」が行われたことは想像に難くない。この購買構造は、子ども向けの雑誌が月刊誌から週刊誌に変わっても存在していたようで、マンガ編集者の中野晴行は『マンガ産業論』（筑摩書房）で「買うのは大人、読むのは子ども」と章立て『週刊少年サンデー』と『週刊少年マガジン』の創刊期について次のように考察をしている。

最大の課題は、果たして親たちがこの本を子どもに買い与えるかどうか、なのだった。

創刊当時の『週刊少年マガジン』と『週刊少年サンデー』はどちらも定価三十円。これは月刊少年誌の平均定価百二十円の四分の一に相当した。（中略）

いかにも大人の週刊誌を子ども向けに直したような体裁は、子どもたちよりもむしろ親たちを意識した物だと思われる。ブームになっている週刊誌に体裁を似せることで、「成長したあなたの子どもにふさわしい新しいタイプの雑誌」であることを強調したのである。⁷

この中野の分析から導かれるのは、大人が子ども向けマンガ雑誌の趣向を整えてきたということであり、週刊少年誌が創刊された五〇年代において、子ど

ものためのマンガは、多大に購買者である大人の影響下のもとで作られていたということだ。『サンデーとマガジン』（光文社）で、大野茂は創刊当時の『週刊少年マガジン』の牧野武朗編集長の販売戦略を次のように紹介している。

「毎週マンガが読める」。それは子供にとつてと大人にとつてとでは、全く逆の意味を持つものだった。

悪書追放運動が依然として渦巻いているなか、マンガ中心の週刊誌を出せば、「毎週毎週マンガを子どもに読ませるのか」という批判の矢が飛んでくるのは火を見るより明らかだ。

そこでそれを少しでも緩和するため、サンデー、マガジンともスポーツ記事や科学読み物、〃もの知り百科〃的な内容を入れ、「これは、あくまでも少年向けのニュース情報誌です」という趣旨でスタートしたのである。⁸

牧野の戦略を確認しても、やはり「親」を意識した誌面作りが必要であったことは明確だろう。「佐武と市捕物控」が掲載された『週刊少年サンデー』も、同様の戦略をとっていたと推測できる。ここで確認しておきたいのは、少年向けの「佐武と市捕物控」には、大人が子どもに読ませて問題ないと感じる「安心感」が存在しなければならなかったということである。

少年向けの作品として「サンデー」系の雑誌に掲載された「佐武と市捕物控」について確認していこう。「サンデー」系に掲載された少年向け作品は十三作品で、『ビッグコミック』一九六八年四月号に掲載されるようになってからの作品数の方が圧倒的に多い。そのため、話題に挙がるのも『ビッグコミック』版の「佐武と市捕物控」のことばかりであり、少年向けの作品に対する評価がほとんど行われていないのが現状である。しかし、「少年サンデー」系の作品について、石ノ森は「意欲作」として振り返っている。「佐武と市捕物控」について言及している石ノ森の次の言葉は注目すべきものである。

『少年サンデー』では、不定期掲載のシリーズ作品（縄と石）であった。

そのためもあってか、意欲(的)に描いていた、と記憶する)作のつもりであったが、評判はもうひとつ、であった。

ちよつと大人っぽ過ぎる”。もっとわかり易く、と何度も注意された。で、昭和43年、『ビッグコミック』という成人コミック誌の創刊と同時に、そちらに移した。画風・ストーリーの容量、テーマなども大幅に変えた。——同一キャラクター、同一モチーフの作品が、ターゲット(読者層)の変化によってどう変質していくのか、『少年サンデー』版と『ビッグコミック』版を比較すると、よくわかつてとても面白い、と思うのだが……。⁹

引用部は、一九九七年に刊行された『石ノ森萬画館』（ショウブプロジェクト／小野寺章）の「自作を語る」というコーナーに掲載されたもので、石ノ森が一九九八年一月に亡くなっていることから、晩年まで「佐武と市捕物控」に対して愛着とこだわりを抱いていたことが窺える。一九六八年、『ビッグコミック』創刊号から一九七二年四月十日号まで連載された作品だが、連載終了後も『ビッグコミック』に断続的に発表され、一九九六年九月九日増刊号には「青大将」のエピソードが掲載されていることから、石ノ森がこの作品を愛着を持って描き続けたことに間違いはない。

さて、ここで引用部を改めて確認したい。『週刊少年サンデー』版は、「大人っぽ過ぎる」という理由で注意されたと石ノ森は述べている。本作は前述の通り「赤い猫」が『少年サンデー増刊』春休みゆかい号に掲載された。その後も何度か増刊号や本誌において一話完結のオムニバス形式で発表されたものの、長編として物語は成立していない。このことから、本作が連載には値しないものと扱われたことが窺われ、石ノ森の「評判はもうひとつ」という発言もそれを裏付けている。しかしそれでも単発とはいえ、『週刊少年サンデー』に数度にわたって作品が掲載されたという事実は注目に値する。

当時の雑誌も現在と同様に、読者の人気を得られない作品であれば、連載途中でであろうと「打ち切り」の憂き目にあう。石ノ森も、多くの作品が打ち切りとなっており、初期作品では、『少女クラブ』（講談社）で一年近く連載された「三

つの珠」も、一つの珠を見つけた後に最終回となっていたり、少年向け作品では「秘境三千キロ」や「にいちゃん戦車」といった作品も約一年の連載後、唐突に最終回を迎えていることから打ち切りであったと考えられる。また、代表作である「サイボーグ009」も「ミューツ・サイボーグ」編においては、石ノ森の意思とは関係なく物語を終えたことがあり、単行本化される際に大幅に描き下ろしページが追加されている。これらの作品以外にも、多くの作品が最終回が近づくにつれて物語の進行速度が上がっていたり、ぶつ切りとしか感じられないような最終回を迎えていることから、石ノ森は長編作品として作品を描くことは少なくなり、急に打ち切りとなった場合も問題がないような一話完結のオムニバス形式を多用するようになっていく。また、打ち切られた石ノ森作品は、「サイボーグ009」以外にはほとんど復活することはない。だからこそ、「佐武と市捕物控」の人氣がいまひとつであっても、打ち切られていないことは注目すべき点である。それだけ、「佐武と市捕物控」という作品が、人気作となり得る可能性があると思われ、編集部信じられていたのだろう。そして、満を辞して『ビッグコミック』への移籍が決まったのである。

石ノ森は初めて『ビッグコミック』への連載の話を持ちかけられたとき、直ぐにその依頼を引き受けたそう。ただし、そこで二つの条件を編集者に突きつけている。そのうちのひとつが、連載作品は「佐武と市捕物控」とすることであった。当時のことについて、石ノ森は次のように述べている。

当時『少年サンデー』の編集長だった小西さんという人が『ビッグコミック』を創刊したとき、「お前は少年マンガじゃ少し難しいのを描きすぎるから、こっちに描いてみないか」と誘ってくれたわけだ。この移行は、僕にとつて成功だったと思っている。ターゲットがはっきりしたぶん迷いもなく描けるようになったし、うまく作品世界を広げて時代の波を乗り越えてくれたのだから。¹⁰

当時の『週刊少年サンデー』編集長であり、創刊時の『ビッグコミック』編集

長でもある小西湧之助は、「佐武と市捕物控」の連載が始まった際に編集長であったこともあって特別な思いがあったのだろう。「佐武市」は小西も気に入っていた作品だったので、「佐武市」を描きたいという申し出にはまったく異論がなかった¹¹と言われており、佐武と市がどのように姿を変え、どのような物語を展開していくか楽しみにしていたのではない。

次に、石ノ森が『ビッグコミック』へと掲載誌を移し、描画法においてどのような変化が見られるのか具体的に分析していきたい。

三、描法の変化について

・「キャラクター」について

ここで、主要登場人物である佐武と市、みどりの変化を見ていく前に、これから使用する「キャラクター」という語について確認しておきたい。石ノ森自身もこの語をよく使用しており、自身の作品について言及する際に「キャラクターマンガ」と公言することもあった。ここで示される「キャラクター」とは、ただの登場人物という意味とは異なるものである。

石ノ森は「マンガ・イズ・キャラクター」¹²として、個性的なキャラクターを創造することができれば、彼らが動き出すことで「マンガ」になると考えていた。「佐武と市捕物控」も、そんな石ノ森の考える「キャラクター」が主となるストーリーマンガである。

現在、「キャラクター」という言葉は様々な場面で多用されているが、しかし実際には本来区別されるべき「キャラクター」と「キャラ」という言葉が混在されており、だからこそ「キャラクター」という語の意味について再確認する必要があると『デヅカ・イズ・デッド』（NIT出版）の著者、伊藤剛は指摘する。

佐武や市をはじめとした登場人物は、言葉の使い方など、身体性を伴った固有の特徴を持つことでその物語の中で独立した存在として「生き」ており、そのどれかひとつでもパーツが異なれば、その時点で彼らは「別人」となってい

まう。暗黙の了解としてこうした登場人物の同一性の保持がなされているからこそ、読者は物語を通してその登場人物の人生に寄り添うことが可能なのだ。このように「キャラクター」は「読者である私たちと同様に『身体をもった人間』が、『物語空間の背後にも』『永続して存在する』ことを想像させること、と定式化」¹³したが、伊藤がいう「キャラクター」である。重ねて伊藤は、次のように「キャラクター」を定義する。

いいかえれば、私たちが「キャラクター」と「登場人物」を等しいものと見なしうるには、この要件が揃っていることが前提条件となるのである。その際には、必ず何らかの形で「キャラクター」が「人格」を持った「身体」の表象であることが要請される。彼にそれがロボットや妖怪や宇宙人といった、「現実にはいない存在」という設定があったとしても、それが「人格」を持った「身体」であることには変わりがない。¹⁴

以上の伊藤の指摘を踏まえて本論では、石森の「キャラクターマンガ」を考える上で、人格を有し、ただの肖像としてのみ存在する人物ではなく、その人生を物語る人物として存在しているものを「キャラクター」とし、人格を有さない存在であるものは「キャラクター」ではなく、「キャラ」として区別する。

・佐武について

まず、主人公の佐武について見ていこう。佐武は岡っ引きの佐平次親分の下で下っ引きとして江戸の町を駆け回る少年である。少年向けにおいては、佐武は十八歳、青年向けでは、佐平次の跡を継ぎ岡っ引きとなり、その後子どもを設ける頃には二十二歳ぐらいと設定されていたことが、石ノ森章太郎ファンクラブ会員である長田明子（現・丹羽明子）と石ノ森章太郎によるテレビアニメ版「佐武と市捕物控」に関する次の対談から把握することができる。

○（長田明子）¹⁵ …最終的には、（最終話「江戸の太陽」で）佐武は何歳ぐらいになってるんですか？

岡っ引きに昇進して、羽織を着る頃には？

Ⅰ（石ノ森章太郎）…岡っ引きになって、子供ができてくる頃には、もう二十二ぐらいになってるんじゃないの？

○…あ。原作ですか？ 原作では二十二……？

Ⅰ…原作の方ではそう。

○…アニメーションでは始まって何歳（いくつ）ぐらい？

Ⅰ…十八のままだろう、あれは。

○…あれ、十八のままですか？！

Ⅰ…十八ぐらいだよ

大体、マンガってのは年齢はあまり動かないんだよ。

ただ、俺の、のちにポツンポツンと描いてるやつでは、もう少し年をとらせんな。

事件そのものが、やっぱりその年齢にあった事件になって来てるからね。¹⁶

以上の発言から、石ノ森は当初佐武の詳細な人物設定をしていなかったと考えられる。そのため、テレビアニメ版が制作され、青年向けに作品を描くこととなった際に、設定を改めて考えたのではないか。少年向けでは、佐武の生い立ちの詳細を知ることができない。佐武という人物が生粋の江戸っ子ではないことがわかるのは、青年向けの「佐武と市捕物控」においてである。

少年向けでは、佐武の出生の背景は描かれることなく、物語を進行する上でそれが妨げになることはない。情に篤い熱血漢である正義の味方という設定によってのみ存在しているにすぎなかった。その根拠として、佐武の外見上の造形に関しての石ノ森のコメントを挙げることができる。

主人公は直ぐ出来た。同じ頃、私は「ミュータント・サブ」というSFマンガを描いていたのだが、この主人公サブを佐武にして、頭にマゲをくっ

つければ、時代物にも通用するサマになったからだ。17

この発言からは、佐武という人物自体が石ノ森にとっては、手塚治虫が使用した「スター・システム」を利用した「キャラ」でもあったのではないかと推測できる。「スター・システム」では、演劇や映画のように一人の登場人物を俳優として、様々な作品へと登場させ、キャラクターは作品によってそれぞれ異なる役柄を演じる。手塚の「スター・システム」は、作品ごとに性格も異なるように描いていることから、当初の「佐武」はこのシステムを用いたキャラであったといえよう。佐武はキャラとして、「サブ」から造形及び属性を引き継ぎ、物語の中で固有の人格を得ることによって、「キャラクター」へと変容し、物語の中で活躍していく。

また、「サブ」という名前が初めて石ノ森作品の中で登場するのは、管見によれば一九六一年の『少女』（光文社）九月号から一九六二年一月号に連載された「ミュータント・サブ」の主人公・サブである。この作品も打ち切りとなっており、物語は中途半端なままで幕切れとなっている。石ノ森自身は、「ミュータント・サブ」について「愛した作品」であると明言しており、「サブ」自身も愛していたことを次のように振り返っている。

同じ主人公、同じテーマで何度も描いた程に「愛した」作品にもなりました。（『少女』の廃刊で連載は途中で終了。次に「中学生画報」に――が、これまた廃刊。「少年サンデー」にシリーズもので短編を何本か載せた後、講談社漫画賞をうけて、別冊少年マガジンにも数編描きました。）18

『少女』版の「ミュータント・サブ」について、石ノ森は廃刊が理由で連載が終了したと述べているが、『少女』は一九六三年まで刊行されていたことから、廃刊が理由ではないのは明確である。また、『週刊少年サンデー』版においても、小西によって打ち切られている。小西は、石ノ森の絵について「石森章太郎の絵は高校生以上か、あるいは幼稚園くらいの子供ならば反応するが、小中学生

向きじゃない、小中学生が感情移入しにくい絵と判断し」19 であり、一九六六年一月三十日第四号に掲載された「ミュータント・サブ」の「幽霊編」を最後に、『週刊少年サンデー』では掲載されることはなくなり、掲載されたとしても本誌とは異なる『別冊少年サンデー』であった。その後、一九六八年に『週刊少年サンデー』で「ブルーゾーン」の連載が始まるまで、「ミュータント・サブ」も「佐武と市捕物控」も掲載されることはなかった。

このときに小西より下された「絵」の否定は、石ノ森にとって、しこりとして残り続けたようであり、『ビッグコミック』版の「佐武と市捕物控」は、人物や物体の輪郭線が少年向けのものとは異なり細く繊細なものになっている。（図1）（図2）



（図1）



（図2）

これは、簡略を意識した少年向けの絵と異なり、線を描き込むことによって、より写実的に描写することで青年読者を意識したのではないだろうか。まず、『ビッグコミック』は「大人の鑑賞にたえうる読み応えある作品」20 を掲載することを企図したマンガ雑誌であり、石ノ森の他に、手塚治虫、さいとうたかを、水木しげる、白土三平といった人気作家を擁していた。さいとう、水木、白土の作品は「劇画」として認知されており、子ども向けではなく、青少年を対象としたものとして受け入れられていた。ただし、水木や白土は、貸本マンガ出身のマンガ家であり、彼らの作品を「劇画」として含むかについては異論があるかもしれないが、本論では「劇画」の読者対象者とされた青年期から成人期向けのマンガ作品を指すこととし、彼らの作品も劇画とする。

これまでに石ノ森が描いてきた「佐武と市捕物控」は少年向け雑誌に発表されており、読者の対象は「少年」であった。しかし、発表の場が変わることによって、石ノ森は登場人物を変更することなく、描法を変更することで、「大人」を対象とした「佐武と市捕物控」を描くことに挑戦している。

『ビッグコミック』版と『週刊少年サンデー』版の差異について、福田淳一は「Shotaro World」版の「佐武と市捕物控」第三巻にて次のように解説している。

この月刊時代の1年間は少年マンガと青年マンガとの過渡期に当り、佐武や市の表情などに少年マンガ的な幼さが残っているのが特徴で、月2回の発行分から画、ストーリーとも次のステップへと上がって行く。画で言えば、マンガ的にデフォルメされていた佐平次親分の鼻が劇画調に描かれるようになったことから見て取れるように劇画調を意識して描くようになり、ストーリー面では、心理描写に重きが置かれ、特に市の心理描写には様々な工夫が見られるようになる。また歳時記や市井風俗に、より重点が置かれた作品も多く登場するようになる。²¹

この解説から分かるように、「佐武と市捕物控」を『ビッグコミック』で連載するにあたって、連載初期は少年向けの描法を引き継いだままであったが、連載を重ねるにつれ、当時の高校生以上を読者のターゲットとした青年マンガ誌において、求められる画へと描法自体変化させていったのだろう。特に、『ビッグコミック』に初めて掲載された「隅田川物語」と『週刊少年サンデー』に掲載された作品とを比較してみると圧倒的なまでに線の描き込みの密度に違いがみられる。

まず、「隅田川物語」は冒頭が見開きで富士山を正面に江戸の町が地図のように一望できるように描かれる。次のページには浮世絵を意識した描法で描かれた一枚画が、さらにその次のページでは建物がいかに細かく描かれたマンガ的な画が浮世絵と対比するかのように入っている。このように作品冒頭で圧倒的な描き込みによる背景だけを大きく見せ、まずは物語の状況や設定の説明を行うこれまでの「分かりやすさ」を重視しない導入は「サンデー」系では見ることが

できない。人物や背景、小物に至るまで繊細な線で写實的に描き込まれた導入部からもこれまでの少年向け「佐武と市捕物控」ではないことが意識されていたことが窺いしれる。この時点では、市の描き方にはあまり変化が見られないが、佐武とみどりの描き方は、頭身自体が今までの少年向けが五頭身くらいであったのと比べると七頭身くらいにまで変化しており、「少年サンデー」系の少年少女といった姿とは異なって見える。特に、「手」の描き方に注目してみると、少年向けでは指が簡略化して描かれていたことと比べると、大人向けの『ビッグコミック』版では一本ずつ指がきちんと描かれ、みどりの指は女性らしい細い華奢な指として描かれている。みどりの不安げに自身の胸を押さえる指先は、まるで指が彼女の心情を物語るかのように心細げに描かれている。(図3)



(図3)

ここまで確認してきたように少年向けと大人向けでは風景描写や人物の内面描写に差異があることは疑いようがない。また、大人向けの「佐武と市捕物控」での十八歳から二十二歳まで成長をしていく佐武は、少年向けとは異なり「葛藤」や「劣等感」を抱く等身大の「男」として確かな存在感をもって作品内で描かれている。特に、佐武が故郷の甲州巨摩郡私市村に一人残した姉の危篤を知られ、里帰りすることを決めた「刻の祭り」で、ようやく佐武の抱える「苦悩」が物語へと直結していく。佐武の父は、元々は武士であったがその生活を嫌い、私市村で百姓として生活をしていた。しかし、彼らの住む谷の村は、山の村の名主から水の制限を受けており、貧しい暮らしを強いられていた。そこで、山

の村の名主に直談判するために父は名主の元へ向かうのだが、そこで彼は雇われていた用心棒の浪人によって斬り殺されてしまう。後を追うように母が亡くなり、佐武は父の仇である浪人に復讐するために単身江戸へと向かった。江戸での生活は、少年向けや大人向けのこれまでの作品に描かれた通り、佐平次親分の下で働くといったもので、この「刻の祭り」まで、佐武という人物を形成する「背景」は一切語られてはなかった。ここで、初めて佐武は自身の奥底に潜ませ続けていた「葛藤」を外界へと吐き出すのだ。佐武の心を読者が初めて知ることとなる独白をここで引用する。

佐武 姉さ!!／おいらは…

おいらは…

お父やおつかあの仇を討つと言って村をとびだした。

で、でも……ほんとうは……

百姓がいやになったんだ この村で暮らすのが……

つらくなったからなんだ!!

お、お妙のことや…… 何もかもから逃げだしたかったんだ!!

おいらは……／おいらは…

意気地がなかったんだ!!²²

この段になって、ようやく熱血漢で情や涙に脆い正義の味方として「完全なヒーロー」であった佐武が、葛藤を抱き、悩みから逃避し、意気地がないままに彷徨い続ける「一人の男」として、リアリティを持った存在として物語で呼吸を始める。

この「刻の祭り」において、初めて佐武の恋愛についても触れられている。引用部で名が挙げられた「お妙」とは、佐武の思い人であり、彼女から思いを返されていたが、彼女の父親こそが山の村の名主であり、谷の村の住人である佐武とは夫婦になることができず、思い余った若い二人は心中を試みるが、山の村の人々に見つかり二人は引き離されることになる。その後、お妙は他の

男と夫婦になり子を授かっていることから、佐武にとって彼女は苦い青春の思い出の象徴でもある。

しかし、命を狙われたお妙の子の命を守り、その子を彼女に受け渡す際には、微笑を浮かべて彼女を見つめていることから、佐武の恋愛に対する傷が癒えたのか、この物語より後のエピソードではこれまで詳しく触れられることなかった佐武の恋愛についても描かれるようになる。

「刻の祭り」の次話である「闇の片脚」では、佐平次の娘であるみどりと佐武の恋の駆け引きが描かれる。佐武がみどりと関係に悩んでいると人生の先輩であり吉原に馴染みの遊女もいる市が佐武に男と女の関係について次のように持論を展開する。

市 男にとっちゃ 女をだきてエって 気持ち起きるのは 頭に毛が

はえてくるのと 同じくれエ 当然のことだ。(中略)

別に悪いことでもおっぱずかしいことでもねエ。

むしろ…… 女と寝たことで……今まで おふくろの腹ン なかの

暗闇から 抜けねエでいた 片脚を 引っこ抜くことが できるん

だヨ。²³

このように、愛欲が混ざる主題は、子ども向けでは取り扱うことができなかったのではないだろうか。大人向けになったことで、石ノ森は「吉原」といった風俗も含めて、あらゆる「江戸」を作品の中で情感豊かに描くことを試みている。また、この大人向けの対象には『週刊少年サンデー』を卒業した青少年も読者として含まれていることから、性教育の一面としても、マンガが一役を買うことになったのではないだろうか。「闇の片脚」に注目すると、石ノ森は情欲を抱くことは自然なことであり、それを恥じる必要はないとマンガを通して読者に語りかけているものと考えられ、大人向けと少年向けでは、取り扱う主題が変容していることを窺い知ることができる。

なお、大人向けと少年向けで変わらないものも存在している。それが、物語

の構造であり、「佐武と市捕物控」ではこれが「謎解き」にあたる。少年向けで描かれた佐武は、市に導かれながら謎解きをしており、彼だけで解決した事件はほとんどない。また、佐武の造形自体が丸っこく、可愛らしく描かれており、相棒である市が中年男性として描かれていることから、佐武はまるで幼い子どもにしか見えない。そのため、佐武は主人公でありながら、市に庇護されて謎解きを行っているようにさえ見えてくる。実際、子どもにしか見えない佐武だけが謎解きを行っても、あまり現実味がなく、いくら子ども向けの作品といえども、読者に呆れられてしまいそうな設定であるが、中年の市が相棒となり、佐武の推理や行動を支えることによって、読者も自分たちのような子どもでも謎解きができるかもしれないという親近感が湧いたのではないだろうか。『週刊少年サンデー』から『ビッグコミック』へと掲載誌が変わり、佐武自身も成長するにつれ、佐武は市に頼ることなく自身の手で謎を解決に導くようになる。市が後ろから佐武を支える関係から、背中を合わせてお互いに支え合う関係にまで変化していくのである。掲載誌の変更がなければ、この関係性の変化は見られなかっただろう。

また、「サンデー」系の特徴として、佐武の「捕縛術」を上げることができる。佐武は「捕縛術」の名手として設定されており、「赤い猫」では、それぞれの技に「風車」や「まぼろし」といったまるで必殺技のような名称が付けられている。また、技を繰り出す際には、「風車」であれば、佐武を中心に円を描くように縄が弧を描いて敵へと向かっていき、攻撃するといったものである。(図4) また、「まぼろし」はまるで佐武が何人にも分裂したかのように錯覚を起こさせながら、敵を縄で絡めとるといったようなアクションまで付けられている。(図5)



(図4)



(図5)

この捕縛術について、石ノ森は「少年ものの発想」として、『ビッグコミック』へと掲載誌を移してからは使用することがなくなったことを次のように振り返っている。

対手下人用の佐武やんの特捕縛術なる「技」は、目明しの十手捕縛という事だ。そのキャラクター同様簡単に思いついた。「アヤトリ」「クモノス」「オロチ」等々珍妙なる名称のついているカッコイイ技術は、そのあまりのカッコヨサ故に、二年程度に「大人モノ」として描き始めてからは使えなくなってしまった。これはあくまでも少年ものの発想だったからだ。²⁴

この特殊捕縛術は、「赤い猫」でも既に登場しており、このときのシリーズ名である「縄と石」は佐武が扱う「縄」と市が扱う「碁石」が元となっている。三作目であり、シリーズ名が「佐武と市捕物控」と改められた「天狗」までは表紙にも必ず縄と碁石が描かれているが、四作目である「花火」以降の作品では表紙にそれらが描かれていない。また、縄は佐武が下人をつ縛する際に毎度必ず使用しているが、市の方は「天狗」を最後に碁石を武器として使用することとはなくなる。時折佐武と市が碁を打っている姿が描かれる程度である。二人が碁を打つ場面は事件について考察を行う「場」として描かれているが、『ビッグコミック』版では、将棋を指すこともあり、盤上で碁石や将棋の駒を並べる

ことで、事件の情報を整理するという機能は残したまま、しかしタイトルとしては「石」のみではなくなったことから、「佐武と市」といった主人公たちの名前を冠したものに改められたのではないか。

・市について

次に、佐武の相棒である市について見ていこう。市は「松の市」と名乗っており、幼少期に馬に両目を潰されたことによって失明し、按摩として生計を立てている。少年向け作品の主人公でありながら、佐武と比べると年齢が高く設定されており、石ノ森自身もこの二人組のアンバランスさを「過去を引きずる大人」²⁵として作品を際立たせるものと考えていた。また、登場人物の中で最も変化が少ないのは市である。

彼は、盲目であることに劣等感を抱きながらも、その弱さを克服するために居合いを学び、仕込み杖によって自分の強さを保っている。そのため、杖が奪われたときの市は、居合斬りの達人として達観した人物ではなく、暗闇に怯える一人の弱者へと姿を変える。健常者ではないことを卑屈に思っていることは、少年向けでも描かれており、佐武を支えることによって自身の存在価値を見出そうとしていたのではないかと考えられる。大人としての強さも、盲目であることの弱さも、市ははじめから曝け出して物語の中で存在していたため、『ビッグコミック』版においても、吉原の馴染みの遊女に甘えてみせたりする一面以外には、あまりキャラクター描写においては差異が見られない。

石ノ森にとって、市は少年向けに彼を生み出した時点で完成されたキャラクターだったのだろう。石ノ森は、「若者と中年の、視点の違いがドラマに厚みを出す事にもなる」²⁶と考えて佐武と市のキャラクターを創造しており、元々のモデルである『座頭市』の「座頭の市」との差異を少年向け作品においても、丁寧に描き出していたからこそ、大人向けになろうとも変わらない人物として「佐武と市捕物控」の世界を生き続けたものと考えられる。

・みどりについて

少年向けと青年向けで、キャラクター造形において大きく変化が生じているのがヒロインのみどりである。みどりは、佐武の親分である岡っ引きの佐平次の一人娘であり、共に生活をしていることから佐武にとっては最も身近な異性といえる。少年向けでは、みどりは顔立ちも幼く小柄に描かれていることから「少女」であることを意識して描かれているといえ、物語においても父親の仕事柄から勝気な性格として描かれている。

ここでは、佐武に対して恋情を抱いていることが言葉や態度から見てとれ、図6で示したコマでは佐武が少女と話していると嫉妬してお尻をつねりあげている。(図6)



(図6)

しかし、少年向けでは佐武はみどりを親分の一人娘として邪険にすることはないが、特別な異性として目を向けることはない。そのため、少年向けにおいては恋愛を主題とした物語は存在せず、物語を盛り上げるためのエピソードの一つとして、みどりが佐武に関わる女性たちに嫉妬するといった場面が描かれる程度であった。少年向けにおいては、みどりの内情に深入りすることはなく、彼女の存在は佐武を慕う年頃の少女としてしか意味を成していない。それどころか全く登場しない回もいくつかあることから、男ばかりの物語に花を添えるためだけに存在していたとさえいえよう。

しかし、大人向けの「佐武と市捕物控」では、みどりという少女は大人の女性へと姿を変え、江戸時代の日常や登場人物たちの内面描写をより現実的に描く上で重要な人物へと変貌している。みどりと佐武の恋愛は、精神的なものだけではなく、肉体的にも通じ合い、佐武はみどりとの子を儲け夫婦になる。しかし、「おぼろ夜の濡れ縁」において佐武はみどりのことを裏切り、たきという女に心を奪われ、彼女の元に通うようになる。少年向けに描かれたみどりであれば、勝気で嫉妬しがちな性格として描かれていることから、すぐにでも修羅場へと発展しそうだが、みどりは佐武の気持ち自身が自分以外に向いていることを察しながら、責めることなく佐武を夜の江戸へと送り出す。

みどりにとって、佐武は唯一無二の存在であり、彼が自分の元に戻ってくる限りは、浮気さえも気が付かないふりをして見逃す寛容な女性へと変貌している。江戸時代、佐武とたきが行った密通は大罪であり、姦通の現場を見つけた場合は、その場で男女とも討ち取っても良いとされており、その場では罰せられなくても、訴え出れば取調べの上で男女同罪とし、女は死罪、男はそれよりも罪の重い獄門となることがあった。後に、姦通罪は死刑から労役刑へと軽くなり、さらには当事者間と親戚縁類仲間が立ち会って事件を金による内済によって解決するようになった。みどりは岡っ引きの娘であり、さらにはその岡っ引きを継いだ佐武の嫁である。騒ぎ立てた場合の罪の重さは承知していたであろうし、そのときには既に佐武の子が腹にいた。彼女は、一人の女であるが母でもあった。夫の過ちを許し、大きな愛で家族を包み込む母として成長している姿が、ここでは窺うことができる。

大人向けの「佐武と市捕物控」において、甘酸っぱい青春物語のような色恋だけでなく、石ノ森は思い合っている、気持ちすがすれ違ってしまった、相手を軽んじてしまうことがある大人の恋愛と夫婦の愛を「みどり」という少女を一人の女として描くことで、綺麗事だけでは語ることのできない情愛を見事に描き切っている。これは、少年向けの「佐武と市捕物控」では描くことはできなかつただろう。

おわりに

本論では、「佐武と市捕物控」を子ども向けとして描かれた『週刊少年サンデー』版と大人向けである『ビッグコミック』版とを比較、考察することによって、石ノ森が読者層の変化によって自身の作品をどのように描き分けていたのかを明らかにすることを試みた。石ノ森は、子どもに対しては「分かりやすい」ことを重視し、描法もできるだけ簡略化し、主線は見えやすいように力強い太いもので描いており、一方、大人向けにおいては、主線は細く、また線を描き込むことによってより写実的な描写を試みていることを確認した。

少年向けと大人向けでは、特にキャラクターの描法にも大きく変化があり、主人公の佐武とヒロインであるみどりの描き方及び、その性格自体もより詳細につくり込まれることによって、大人の鑑賞に耐えうる物語へと深化されていることが確認できた。石ノ森は、「佐武と市捕物控」に対して次のようにその差異をまとめている。

アクション主体の事件追跡がテーマだった少年マンガ「帖」から、こちらは、江戸の四季、風景、そこに生活する老若男女の悲喜こもごもを通して、より複雑なリアリティのある事件の「控」にしていこう……。

傍点の部分が「移籍」の際に考えた、子どもマンガでは意識的にスッとはしてきた大人っぽい部分です。²⁷

石ノ森は、読者ターゲットが子どもから大人に変わろうとも、「物語」に手を加えるのではなく、物語の魅せ方を柔軟に変化させ、よりリアルな人間描写を試みたことがこの引用部からも推察できる。数多くの作品を描き、現役のマンガ家として亡くなるまで第一線で活躍し続けるためには、読者の変化を機敏に感じ取り、分析し、読者のために作品を描き続けることが必要であったのだろう。石ノ森作品が現代に至るまで読み継がれているのは、「読者」と常に向き合

竹内オサム『戦後マンガ50年史』（筑摩書房、一九九五年三月三十日）

夏目房之介・竹内オサム編著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、二〇〇九年四月二十日）

福田淳一編著『風のたより No.347 石ノ森章太郎研究総説 石ノ森章太郎作品解説集 1』（石ノ森章太郎ファンクラブ、二〇〇五年十二月三十日）

福田淳一編著『風のたより No.357 石ノ森章太郎研究総説 石ノ森章太郎作品解説集 2』（石ノ森章太郎ファンクラブ、二〇〇七年八月二十五日）

みなもと太郎『マンガの歴史——1』（岩崎書店、二〇一七年八月三十一日）